

第一章 「土佐街道」 調査の概要

一 調査の目的

町内各地に遺されている古い道は、古来、文物や人々の交流の舞台となり、本町の歴史を理解する上で重要な意味を持つものであるが、近年、急速にその姿を失いつつある。

そのため、これら古い道が果たしてきた歴史的役割と、道及び道に沿って遺されている文化遺産を、周囲の環境も含めて調査・記録・公表することで、今後の保存整備や町民の積極的な活用を資することを目的とした。

二 調査対象

江戸時代の「土佐街道」（三坂越えの久万高原町分を中心とし、関連するそれ以前の道や遺物を対象とし、土佐街道の道筋の両側各百米程度の範囲に絞った。

三 調査事項

- (1) 「土佐街道」の歴史的意義・沿革及び周囲の環境の現状と特性
- (2) 土佐街道及びこれに沿う地域に残る文化財の分布状況と保存の実態

四 調査方法

文献調査や聞き取り等で判明した「土佐街道」を踏査し、GPSトラックデータに採取し、ルートを特定し、地形図上に記入する。また、写真撮影や実測等により、「石の文化財一覧」に記入する。これらの調査票に基づき、「報告書」を作成する。

五 調査者

土居通秀 古田隆 八鬼由和 八鬼貴 山之内敏秋

六 協力者

亀井 正幸氏（亀井草花研究会）



右は森松の二里石、左は大洲街道標・金比羅標



札の辻の元標

第二章 「土佐街道」の歴史的意義

一 呼称

「土佐街道」というのは、伊予国から土佐国へ向かう街道のことで、一本ではなく、東予にも南予にもある。今回の調査対象は、松山から三坂峠・久万を経て高知に至る旧街道の内、久万高原町内分に限定している。久万地方の人々は松山街道と呼んだり、殿様道・殿様街道と呼んだようである。また、幕府の政策として、東海道以外は街道と呼ばないよう定めたことにより、「土佐道」が一般的であったともいわれている。

二 近世「土佐街道」の成立

関ヶ原の戦い直後の慶長六年（一六〇二）に徳川家康は東海道の伝馬制度の整備に着手し、慶長八年（一六〇三）には江戸幕府が、江戸日本橋を架設し、翌年には日本橋を起点に諸街道に一里塚を築かせ始めている。元和元年（一六一八）には箱根に關所を開き、寛永十二年（一六三五）には参勤交代制を敷いている。こうした政策の影響を受けて、松山藩もかなり早い時期に領内の街道を整備し伝馬の制を採用し始めたようである。

松山藩では、元文五年（一七四〇）から寛保元年（一七四一）にかけて一里塚を木製のものから石製のものに作り替えたという文献がある。「垂憲録拾遺」の定番公の項に次のような記述がある。

御領界立石郡界并里塚、元文中迄立木にこれ有り候故、数力所に付き、年々御修覆御手も離れず候へば、公の御代寛保元西年三月、立石に相成し候由：

また、「松府古土談」にも元文五年のこととしてほぼ同様のことが記されている。「松府古土談」には、松山藩領にあった四〇基の里塚石の記述があるが、土州道として次の一二基が記されている。

- 一里 久米郡尼山村
- 二里 浮穴郡森松村
- 三里 浮穴郡荏原村

- 四里 久万山馬次久谷村
- 五里 同窪野村之内桜休場
- 六里 同東明神村
- 七里 馬次久万町村
- 八里 菅生村
- 九里 有枝村
- 十里 七鳥村
- 十一里 東川村
- 十二里 菴川村

以上が、近世「土佐街道」の成立であるが、古代では律令体制下で都と地方国府を結ぶ官道（駅路）が、三〇里（今日の四里、約一六キロ相当）ごとに一駅を置く制度として全国的に整備されたようである。養老二年（七一八）以前と、養老二年から延暦一六年（七九七）は、越智郡にある国府から高縄半島の西海岸を南下し、現在の国道三三号線に沿って三坂の峠を越えて土佐国吾川郡の仁淀川沿いに土佐国にいたるものであるが、これは全長約九八キロで駅を置く原則に照らせば六駅となり、「日本紀略」にある一一駅とあわないという異論もある。中世に



入野から見た大除城跡

も、かなりの人々が住み、共通の生活要素を持ちつつ、異なった生産活動があったはずで、当然、交易や交流がありそのための道の成立は、あつたはずだと考えるのが妥当であろう。愛媛県教育委員会の「土佐街道三坂越え調査報告書」は、中世以前の「原土佐街道」を想定し、中世城館遺跡の分布と赤蔵ヶ池の鶴伝承を取り上げている。前者は、三坂以遠の荏原城・大友城おおともの存在が久谷・東方・荏原の安定した農耕地を支配すると同時に、当時の政治の中心地道後と久万郷を結ぶ交通路を押さえるものではな



森松須我神社の五里石

新張城を拠点に旧浮穴郡一帯を支配していた国人領主土岐氏が美濃源氏土岐氏の一族であり、自分の所領内にある不気味な雰囲気をたたえる赤蔵ケ池をみて、自らの先祖源頼政に仮託してできあがった伝承であろうと推論し、三坂峠を挟んで行き来していた原土佐街道の存在を裏付けようとしている。

三 コースの概要

「土佐街道」は、松山札の辻を起点に、天山、森松、恵原、久谷、窪野を経て久万町内に入り、美川から高知県に向かっていく。先述の通り、里塚石が設置されたが、一里石、四里石は紛失しており、五里石は本来の場所(三坂峠近く)を遠く離れて(森松須我神社境内)存在しているようである。久万高原町内には、六、七、八、九、一〇、一一、一二の七基が若干の移動はありながらも存在していることは貴重である。詳細は、第三章と資料を参照されたい。

四 街道の利用

(1) 松山藩の久万山支配

久万山は、俗に「久万山六千石」といわれる松山藩の重要藩領の一つで、久谷・窪野も含んで二六か村からなり、中心地久万町村には代官所(代官は常駐せず)をおいて久万山支配の拠点にしていた。したがって「土佐街道」をもっとも頻繁に利用したのは久万山支配に従事する松山藩士や久万山の村役人であったと考えられる。「松府古土談」や「松山叢談」には、井門村、荏原村、久谷村、東明神村、有枝村、七鳥村に馬次場が設けられていたと記

されているが、いずれも「土佐街道」沿いの村であり、松山藩士の往来の便を図ったものと考えられる。

(2) へんろ道との重なり

久万高原町三坂から野尻までは「土佐街道」とへんろ道がほとんど重なっており、その沿線には、へんろ道標や常夜灯が今も残っている。かなり大きく立派なこれらの石碑の存在は、往來の盛んな様子を証明しているようである。また、遍路の途中で不慮の死を遂げた人の墓石や供養碑も存在し、貴重である。

(3) 時宗遊行上人の回国

時宗の開祖一遍の後継者を遊行上人というが、そのうち第四二代遊行上人尊任は延宝三年(二六七五)に「土佐街道」を通過して松山から高知へ向かっている。

(4) 百姓一揆の道

天明七年(二七八七)土佐(用居・池川)の百姓五〇〇人余が水ヶ峠から松山藩に逃散し、一部「土佐街道」を通過して大宝寺に移っている。この史実は、「土佐街道」の利用もさることながら、寛保元年(一七四一)の久万山百姓一揆に学んで大宝寺を頼っていることがうかがえ興味深い。天保一三年(一八四二)にも名野川郷の百姓三三〇人が大宝寺に逃散している。

(5) 文人たちの旅

天明五年(一七八五)九月二日から岩屋寺参詣をした松山田光寺の住職明月は、「南山紀行」において、三坂峠の眺望のすばらしさ、土佐街道の宿場町、大宝寺の門前町、松山藩の久万山支配の拠点としての久万町の賑わいを描いている。

明治一四年の七月には、正岡子規らが同コースをたどっているが、季節・年齢・旅の仕方の違いなどあって、明月の旅とはずいぶん違うものになっている。正岡子規の「三坂望松山城」の漢詩は三坂峠に建っている。

五 近代での変遷

(1) 明治一二年(一八七九) 新たに国道・県道設定

七鳥までは従来通り、その後は、現在の久万・池川線とほぼ同じである。
(2) 明治一〇年代 四国新道計画ができる。

松山・高知間は、現在の国道三三三号とほぼ一致するコースで、明治一九年（一八八六）起工式を行う。明治二五年（一八九二）八月愛媛県分竣工、明治末年には県道土佐街道と呼ばれるようになる。

(3) 大正九年（一九二〇）には県道松山・高知線と改称される。

(4) 昭和二〇年（一九四五）国道三三三号に昇格する。

(5) 昭和二七年（一九五二）一級国道三三三号となる。

(6) 昭和四〇年（一九六五）一般国道三三三号となる。

(7) 平成二一年（一九九九）三坂道路着工 平成二四年（二〇一二）竣工予定

第三章 「土佐街道」の確定(特定)

私ども五人の調査員は、過去の調査でほぼ確定している「土佐街道」を實際に踏査して順路を特定することにした。各種の資料と地図、GPS機器、カメラ、測量具等を携行し、現地に行らっしゃる方々からの聞き取りもしながら踏査を進めた。降雪など季節的条件があるので、二箇の土佐境から始め、三坂へ向かう逆コースを採ったのだが、ここでは、読者の便を図り、順コース仕立てにしている。

一 三坂峠―越ノ峠

久万高原町の「土佐街道」始点は三坂峠であるが、少し足を伸ばし「鍋割り坂」(01)を加えることにした。後述するように「土佐街道」沿いにある「仰西渠」とともに元禄期の山之内仰西の偉業を偲ぶものだからである。故伊藤義一氏の「この険しい坂道は久万山人にとって宿命的なもので、久万山の文化を遅らせた最大のものであった。：あまりの急坂のため、せつかく城下で求めてきた鍋を取り落として割ってしまった、と伝えられた難所だが、これを改修したのが元禄の山之内仰西であった」という記述が久万山人の思いを端的に語って

いる。また、伊藤氏は「大きなカーブをして、その右端が左上に曲がる角のところに：半分に折れた五里石が建っていた」との証言を聞き採られているが今は存在しない。しかし、故川崎清規氏は、ほぼ二里に相当する森松須我神社境内にあるものが五里石ではないかと指摘しておられたし、松山市教育委員会版の「松山の道しるべ」には「凝灰岩であることや書跡等から松山藩が寛保元年三月までに建立した里程道標に間違いはない。」と記されている。

三坂峠前後の道は、「土佐街道」であると同時にへんろ道でもあり、国道が開通するまでは大変にぎわったようである。次に紹介する三坂馬子唄に歌われる「馬子」は賃金をもらって、物を目的のところへ運搬する人で、「駄賃持ち」と呼ばれ、「馬追い」「なかせ」「馬方」とも呼ばれていたという。

三坂越えすりや 雪降りかかる 戻りや妻子が 泣きかかる

むごいもんぞや 久万山馬子は 三坂夜出て 夜戻る

わしも若いときや 城下まで通うた 高井の川原で 夜が明けた

馬よ歩けよ 杓買うて履かそ もどりやとうきび 煮て食わそ

馬による物資輸送は、当時、最大最良の方法だったようで、多くの「駄賃持ち」がいたらしいが、道の幅員が狭いので、振り分け荷物を満載した馬と馬との行き違いは困難を極めたようで、馬の首に鈴をつけて往来し、鈴の音を聞けば手前の広い場所待って離合するようになったのだという。人馬往来の多さを物語るように、今も峠の近くには、「駒つなぎの杉」(02)「駒つなぎの石」(03)が残っている。

三坂峠には、地藏尊(04)があり、右手の伊予鉄研修所近辺には、正岡子規の「三坂望松山城」という漢詩碑(05)、四国スキー発祥地碑(06)、郡長檜垣伸の頌徳碑(07)が建っている。檜垣伸は明治一四年(一八八一)上浮穴郡長として赴任し、上浮穴の開発と発展には道路建設が根幹だと説き、四国新道開削に寝食を忘れて取り組んだという。そして明治二五年(一八九二)開通にこぎつけた。遺言により、仏式の葬儀は行わず真光寺墓地の桜の木の下に、「埋骨注心血之地」と刻んだ自然石の墓標が遺されている。

三坂峠について述べた文献には、必ず「鈴木茶店」が登場するが、その鈴

木の子孫の家の前を通り国道三三三号へ出る手前にへんろ標(08)があり、国道を渡った反対側の和泉さん宅裏には三基のへんろ墓(09)がある。ここから道は怪しくなるが細い谷の右岸に出て小さなせせらぎを渡る手前にまたへんろ墓(10)がある。さらに進むと、堀切のような景観をした典型的な馬道(11)を通り、古い木製の小さな橋を渡って左岸に移る。ここに、天保一五年 播州印南陰山新村五郎兵衛母とめ、と読み取ることが出来る墓石(12)の記録があるが、土地造成で移動したのか残雪に埋まっているのか、現在は見あたらない。

この上あたりの国道三三三号脇に、各地に多くのへんろ標を残していることで知られる越智郡朝倉上村武田徳右衛門の道標(13)がある。県教委の調査聞き取りでは、四国新道開通後に旧道から移転したのだらうと推論している。さらに藪こぎを続けて、小川の左岸を下ると、文政八年の供養塔(14)の前に出る。正面には、奉納神社仏閣日本回国供養塔とあり、九州筑後久留米の照空光嚴大徳なる人物名が刻まれ、裏面には、施主同行妻さよ 同娘とも とあるので、ここで死去した人物を同行の妻と娘が埋葬して、夫(父)の志を記して供養したものと読み取れる。

ここからは、大宝採石(株)の石切場用地・工場になっており、国道通りの道を通っていたのか国道に沿ったやや下側に道があったのか皆目見当が付かない。「埋もれた土佐道・その後」の聞き取りでは、アカサコの対岸で唐子川を渡った「土佐街道」は、東明神の低地へ出たものと解している。現在では、三坂新道工事中の道路から下り、開田されたところの農道に沿って六里の道標を指す。ここら辺り一帯は圃場整理が行われて「土佐街道」は付け替えられている。見えてきた六里石(15)も若干南に移動しており、道の反対側には、常夜灯(16)もある。高山寺・河内神社の前を通るが、河内神社には、三輪田米山の揮毫になる社碑と「大順成徳」の文字を刻んだ注連縄石(17)が見える。さらに南下を続けると、東方の中世城館跡「舟山城」主であった船草出羽守仲重の墓(18)があり、近くの国道脇には慶応三年(一八六七)の立派な常夜灯(19)が建っている。この銘文にある「天」は天照皇太神宮、つまり伊勢信仰、「金」は金比羅宮、金比羅信仰、「石」は石鎚神社、石鎚信仰を意味し、それぞれの講が

あったことをうかがわせる。その下の「土佐街道」沿いにはへんろ墓とともにへんろ標(20)があり、その後国道に出る。そのすぐ南に牛頭天王社(21)があり、隣は地域の集会所となっている。

ここからの「土佐街道」は圃場整備の影響を受け痕跡らしいものがほとんど残っていない。国道が久万川を渡る新大橋のもとにへんろ標(22)があるが、槻之沢、畑野川を経て岩屋寺へ行く道の分岐点となっている。「土佐街道」は橋を渡り高殿神社の東側を通り、国道を横切り西側の集落の中の新西国三三札所案内標(23)を抜けて再び国道に合流する。

ここには、県指定史跡「仰西渠」(24)がある。明暦(一六五五―一六五八)から寛文(一六六一―一六七三)にかけて久万町の商人山之内彦左衛門(号仰西)が私費を投じて切り開いた用水路で二五ヘクタールの水田が潤されたという。規模において、東の箱根用水には及ばないが、ほぼ同時期、ここ久万町で町人の事業があったことは注目されている。国道沿いには頌徳碑(25)が建てられている。この東には、はるか高いところに大除城趾(A)がある。戦国時代、道後湯築城主河野氏の重臣であった大野直昌の居城で、曲輪、石積み、登り石垣など、貴重な遺構がある。これら中世城館と「土佐街道」の関連は、第二章で述べたとおりである。

さて、ここから「土佐街道」は、「仰西渠」から引いた水路に沿って延びている。旧国道と現国道が分岐するところで西に入り、南へ振って細い道を行くとへんろ道標(26)と馬頭観音(27)や地藏群が見えてくる。パチンコ店の南で国道を横切ると民宿「一里木」の前に七里石(28)が建っているに出会う。このあと、伊勢神宮の裏を通っていたという道は塞がってしまっていることはできない。いちど旧国道に戻り、西進して水田はしを通り民家の間を縫うように南に進むと川沿いの道になり、旧国道(現町道)にでる。ここには嘉永五年(一八五二)の銘が残る立派なへんろ標(29)がある。道標にあるように、四四番大宝寺へは旧国道を北に戻り、右折するが、この地点にも弘化五年(一八四八)のへんろ標(30)がある。「土佐街道」は、嘉永五年の道標から少し東へ入り、おもご酒造の裏に回り南進し、町立病院への道路に出る。ここから五〇メートルほど西へ進

み、細い道路を二〇メートルくらい進むと真光寺墓地の前に出る。ここには、すでに述べた山之内仰西の墓(31)と檜垣伸の墓(32)がある。

旧国道に戻って久万小学校前で右斜め前の小さい道路を進む。この道を南進して再び旧国道に出、道路を横切って民家の裏を通り、旧国道に出るところで田んぼの横を通り、水路沿いの道を南進する。町営住宅裏で細い道路に出るので、そこを南進するとまた旧国道に出る。農業共済組合事務所を少し過ぎたところで西に向かうと久万の牛市として、日本有数の規模を誇った牛市場跡とその北側に、牛市場開設に功のあった高野幸治を顕彰した市場開祖碑(33)が建っている。碑の石は牛の角を表し、台座は牛の面を造形しているといわれる。

高野幸治は天明年間に生まれ明治六年(一八七三)に没しているが、商才に富んだ人だったようで、一二歳で近所の馬喰白石新七に弟子入りし、一三歳で独立、一人前の馬喰となり、数頭の牛や馬を引いて農家を回り個別交渉をするこれまでのやり方を改め、当地の三島神社の秋祭りに「市」を開く方法を探り大盛況を博し、「幸治市」とよばれるようになった。その後郡内県内はもとより中国・九州からまで集まるようになり、「幸治市」は「野尻市」に変わっていった。開設当時から明治の中頃までは馬市が全盛をなしていたが、搬出、輸送交通の一切が馬から車に変わり始め、日清・日露戦争後の交通機関の発達、道路改良と相まって、明治の末期から牛が大半を占めるようになった。最盛況時は一二〇〇頭の出頭があり関西一を誇るようになった。昭和三〇年代の高度成長期から下火になり、現在は開設されていない。

牛市場跡の少し南にへんろ標(34)がある。「嘉永四年(一八五二)二月」と、「右いはやじ江二リ 左すがは山道二十五丁」の銘があり、大宝寺道と岩屋寺道の分岐点であり、松山藩と大洲藩の境界点でもある。隣には倒れた馬の供養をしたと思われる馬臺(35)がある。

引き返して、旧国道の三叉路から中野村の方へ進んで橋を渡る前に右折(南)し家の前のへんろ標(36)の横から川を渡り東へ進んでいくのが「土佐街道」である。今は河川改修が行われて、橋もなければ土台もなくなっている。この後、県道を少し進むと林業試験場手前から東に延びる道が「土佐街道」である。現

在、この道に沿って道路新設作業が行われており、かなりの部分新道に取り込まれている。

二 越ノ峠―七鳥

この新道を登り切ったところが越ノ峠(37)で、林道を南東方向に上って行く道路左側に、八里石(38)が立っている。この里石は、この山上に電波中継塔建設のための道路工事中に破損したものであったが、修復し、平成九年(一九九七)十一月二日、この地に復元された。この町道が大きく右へカーブするところで町道を外れ、谷沿いの道を歩く。かなり上ったところで左へ振り尾根へ出、そのまま右へ上ると先ほどの町道の延長と合流する。町道をしばらく進んで、左側の山道にはいる。しばらくすると堀切のようになった、典型的な馬道に行き着く。ここが「はじかみ峠」(39)であり、ここから上谷へ向かって下っていく。町道がヘアピンカーブしているところに、地藏尊(40)がおかれているが、私たちは、これは町道ができてから移動したもので、先ほどの堀切のところが「はじかみ峠」だと考えている。

そのまま下っていくと上谷からの林道終点に出会う。林道を一〇メートルくらい下ったところで、左手の作業道に入り、谷川沿いに下る。はじめは右岸の道を、途中から左岸に移りまた右岸に戻る。そして、林道に合流する三〇メートルくらい手前で、左側のコースを採る。この道の途中には、石崖のところに石仏(41)があるが、上谷集落の上を通り、旧上谷橋へ着く。この橋を渡って県道に出て、すぐ谷沿いに入るのであるが、橋がなくなっていたり、荒れた道であったりするので、左から、色の峠への林道を歩くことにする。橋が架かっていたと思われるところに馬頭観音(42)が祀られているが、林道に背を向けているので人々は気づきにくい。「土佐街道」は左岸を通っていたと思われるが、荒廃しているので右岸の林道を歩くことにする。この林道が上方で谷川を渡る手前で、左手に作業道が付いているので、この道を上る。まもなく左手の大きな杉の木の下に九里石(43)が見えてくる。私どもの調査の際は、倒れていたが、この九里石は、根本のところが折れているのでたびたび倒れるのだという。つづいてジグザグの道の上ると、「色ノ峠」(44)へ付く。以前あった石仏

を探したが見つかることはできなかった。

「色ノ峠」からは程野集落へ下るのであるが、すっかりした道のところと、荒廢した道との差が大きい。荒れたところは、風倒木が遮っているため、便宜的に迂回しているところなどが見受けられるが、堀切のような馬道が見られるところを優先した。通称「四ツ辻」(45)へきて、直進し下っていくが道の脇に供養塔らしきもの(46)が見える。程野集落はわびしくはなっているが、こぢんまりした里山の景観を保っていて好感が持てる。田んぼの横を通って小さい橋を渡り、町道へ出る。この道路沿いに「土佐街道」はあったのだが、道路が擁壁部分を切り裂いたためになくなったり細くなったりして通れないので、町道を歩くことにする。町道を二キロメートル下って、左の小谷の脇の地藏尊(47)を拜んで山道にはいる。よく整えられた道をしばらく上ると、「かしが峠」(48)に着く。地藏尊も祀ってある。ここから緩やかな下り道を東に進み、七鳥集落に出る。茶工場の上を抜けるとすぐ十里石(49)が目にはいる。反対側には常夜灯(50)が立っている。この十里石は、里の字の上が削り取られた感じになっており落ち着きがないが、二箇にある十一里石と立て場所を間違えたために、十一里石は、十里に一を加えたので窮屈になり、ここのは一を削り取ったので傷ついたのでという伝承がある。

この里石を過ぎると東光寺(51)の脇を通る。この東光寺は、

土佐の高知のはりまや橋で 坊さんかんざし買うを見た

と歌われた僧「純信」の過去帳を取めた寺である。純心はお馬さんと駆け落ちし捕らえられて川之江へ送られたが、優れた人物で、寺子屋の子どもたちにも地域の人々にも慕われ、教育の実をあげた功労者として「純信堂」まで建てられている。一方の「お馬さん」は美人であるだけでなく、しっかりした人で、裁判を担当した人が「お主は親子ほども年の違う坊主にほれるとはどうしたところか」と問うと、「坊さんが子どものときから好きでした。年の違いなぞ、人が何というてもかまん」と言っつて悪びれもしなかったとある。二人の恋は本物であったと見られるが、お馬さんは東京で成功した息子のところへ行き幸せな生涯を送ったといい、純心は、ルートこそ分らないが、東川へきて、岡本姓

を名乗り、生涯を終えている。東川に墓(52)がある。ひよつとしたら、純心も「土佐街道」の一部を通って東川へきたのであろうか。この後、県道へ出て、久万高原では珍しい沈下橋を渡り、山を登って土佐境へ向かうことになる。沈下橋近くの石仏(53)は水難者の供養碑であるという。

三 七鳥―土佐境

沈下橋(54)を渡りながら、面河川の美しさを堪能する。石が光っているし、水が澄んでいる。最後の清流は四万十川だけではないと思う。橋を降りて丸い石の上を踏み対岸に渡る。道は左右に分かれるが、左側を進む。一〇メートル足らずで右上に上る道が付いているので息を切らしながら歩く。あまりいい道とはいえないが、そう荒れているともいえない。急坂を上って尾根道に出ると少し緩やかになる。その道の右手下の急斜面は「老僧淵」(55)に続いている。昔の高山の子どもたちは学校への行き帰りか、石を投げて淵に落ちる音の大きさを競う遊びをしていたという。この道を上りきると養川からの舗装された農道に出る。お墓(56)がたくさんあるが、道路を横切り、何かの公共施設だったような建物の横から、山道を登っていく。危なっかしい谷を渡ると、天然記念物に指定されているシデの大木(57)がある。高山集落の入り口である。再び農道を横切り高山集落をつききって筒城野地への峠に出る。ここには首のない地藏(58)が祀られており、地藏峠と呼んでいるらしい。ここからの道は、文章で説明しにくいので、地図のトラックデータを参照していただきたいが、農道と四回出会う複雑な道となっているようだが、「土佐街道」そのものは最短距離を歩いていて、農道の方が曲がりくねっているのである。かなりの距離を歩かなくてはならないが、電波中継塔の北に十一里石(59)を確認することができる。この石の文字配置については十里石のところの説明したが、この石は設置当初から全く動いていない数少ない里石だといわれている。さらに進むと農道出口に近く、通称「天下泰平の石」(60)と呼ばれている石に出会う。大正八年(一九一九)建立の頌徳碑兼道案内であり、ここが交通の要所であったことを想像させる。

この近くを少し南西に下ったところにあるのが「赤蔵ケ池」(61)である。「平

家物語」(巻四)によれば、「頭は猿、軀は狸、尾は蛇、手足は虎の如くにて、鳴く声鶴にぞ似たる」怪獣が夜な夜な現れて天皇をおびえさせたので、源頼政を召して退治させたという話である。鶴の声をした怪獣で鶴ではないのだが、鶴退治の伝説として定着している。ここにいた頼政の母が息子に手柄を立てさせるために鶴に化けて京に舞い上がり、息子に討たれて手柄を立てさせるといふ物語だが、美濃の土岐源氏の一族の浮穴支配に合わせて流布された伝説といふことができよう。

農道を二箇集落へ少し下り、カーブのところから北東に進む車道(作業道)があり、しばらく進むと右の林内にわずかに残る踏み跡をたどって「土佐街道」を進むことになる。ここからしばらくは荒れるに任せた悪路が続くが、さらに進むとくぼんだ道が二本、三本になっているところ(62)を通る。いずれも「土佐街道」である。馬の蹄で深く削られた結果の姿で、馬道の典型だそうである。このあと、尾根道を忠実に進み、石鎚展望所(63)に出る。さらに少し進むと「盗人石」(64)というのに出会う。石鎚山で賽銭を盗んだ男が天狗に捕まり投げ飛ばされて石になったという話や、七人の悪党が金を盗んでここまで来たが、一服しているところへ怒った石鎚の神が大石を投げ七人を下敷きにしてしまったという話もある。川崎清規氏によると、この付近一帯の地質は緑色の結晶片岩であるが、盗人石だけは石鎚山頂の安山岩と同じであるという。不思議なことである。

町有林の境界に沿って続いている平坦な「土佐街道」をしばらく進むと「猿楽」に出る。十二里石(65)があり、奥に大師堂(66)がある。十二里石は二〇〇メートル先にあったのにここへ移動したとの伝承がある。手前には「猿楽石」(67)と呼ばれる大きな路頭があり、猿が踊ったともいわれるが、「猿楽」を演じる石舞台に見立ててもおかしくないような広い構えである。一〇〇メートル東へ下ると、通行中の馬を大蛇が引きずり込むという伝説の「底なし沼」(68)がある。その蛇害を払うために建てたのが大師堂だともいわれている。

ここから東の「土佐街道」は、国有林の中を通っており、間伐や皆伐によってつけられた作業道(通称ジャガー道)が縦横に貫通し、ずたずたになつてお

り、土佐街道の特定は不可能な状況である。文化財保護や歴史の道保存の課題を突きつけられているようですら思いをする。二万五千分の一地形図が示す点線の道(「土佐街道」)に沿った形で県境に着いた。黒滝峠といい、旧池川町教育委員会設置の標柱(69)がある。その裏に二体の石仏(70)があり、一体は馬頭観音でありもう一体は地藏である。二体とも「天保十二 巳四月」とある。ここには十二里十八丁の里石があったという伝承があり、それらしいもの(71)が、さらに進んだ旧池川町の水ノ峠大師堂で見つかり、久万高原町役場美川支



「十二里十八丁」の標石らしき石

所に保管されているが、本物は別のところにあるとの説もある。

また、この土佐境一帯には、池川方面からの「姥捨て山」の伝説があるが、特定しにくい。

(「ふるさと久万」40号より)

むすび

十数年前から、たびたび通った道であったが、今回踏査してみて、あらためて感じたことをまとめて、結びとしたい。

一 主眼であった「土佐街道」については、よくぞ保存されたものだと感じ銘を受けると共に、主たる標柱である里石が、本町内に六里から十二里まで、多少の移動はありながらも、七基全部存在することに大きな価値があると感じた。これは、産業構造、生活様式に、これらを破壊するほどの激変がなかったことと共に、先人の営みや祈りを大切に思い、価値を認めてきた地域住民の知恵が働いてのことだろうと考える。こうしたことを、現在の我々が継承し保存していく課題の重みを感じる調査であった。

二 「土佐街道」は官道でもあり地域住民の生活道でもあり、人生のあるいは宗教上の修行の道であり、異文化・異次元の情報を得る道であり、人生を楽しくする物見遊山の道であったはずで、そうした人々がここで何を感じたか想像して歩くことは、調査者にとっても創造的で楽しいことであった。

三 こうしたことに対比して、工場用地になったところ、宅地化が進んだところ、耕地整理が行われたところ、河川工事が行われたところ、森林の間伐・皆伐で作業道を縦横に抜いているところなどは、通行不能の状態になっており、「土佐街道」の面影は完全に消えていた。文化遺産の保存と開発との調和をどう図るかが今後も大きな課題になると考える。自然現象によって崩壊したり紛失したりしているところがほとんどなかっただけにその感を深くしたのである。

四 「土佐街道」のような歴史・文化資源の価値を多くの人々に享受してもらうためには、実地はあまりにアクセスが悪すぎる。かなりの労力を要するが、「土佐街道」の整備と道案内標柱の設置が緊急に必要である。昔の人が、里石やへんろ標に導かれて移動や旅をしたようにである。また、今日の新しい情報網を使って、多面的な宣伝が必要であろう。

五 今回の調査では、「土佐街道」に関連して沿道の石の文化財を重点的にとりあげたが、数百年の経年劣化は致し方なく、銘文の読み取れないものもかなりあった。不可能なものもあるが可能なものについては、かなりの時間を要するが読解に努めたいと思う。また、報告書や付属資料に取り上げなかった文化財の調査も今後の課題にしておきたいと思う。

六 「土佐街道」に深い関係にありながら、今回調査の手を伸ばすことができなかった「大除城跡」をはじめとした中世城館の調査も重要であり、町内全域に広がるこれらの遺跡を調査すると共に、価値の高い遺跡については、整備・保存を提言していきたい。

七 こうした歴史・文化遺産は、現地での確認が欠かせない。講演・講座等での学習と共に、現地へのフィールドワーク的な事業を行い、知識と共に、実体的な歴史・文化の素養を身につけ、近い将来、ガイドとして活動できる人



01 鍋割り坂



04 地藏尊



03 駒つなぎの石



02 駒つなぎの杉



07 檜垣伸の頌徳碑



05 子規の漢詩碑



06 スキー発祥地碑



09 へんろ墓と馬頭観音



08 へんろ標



10 へんろ墓



15 六里石



14 供養塔



13 徳右衛門へんろ標



17 米山揮毫注連縄石



17 米山揮毫の社碑



16 常夜灯



19 常夜灯



20 へんろ標



18 舟山城主の墓



23 西国 33 札所案内



22 へんろ標



21 牛頭天王社



26 へんろ標



24 仰西渠



25 仰西頌徳碑



29 福井町のへんろ標



27 馬頭観音



28 七里石



32 檜垣伸の墓



31 山之内仰西の墓



30 へんろ標



36 へんろ標



34 へんろ標



33 市場開祖碑



38 八里石



35 馬墓



42 馬頭観音



39 はじかみ峠



40 地藏尊



供養塔?へんろ標?



43 九里石



41 石仏



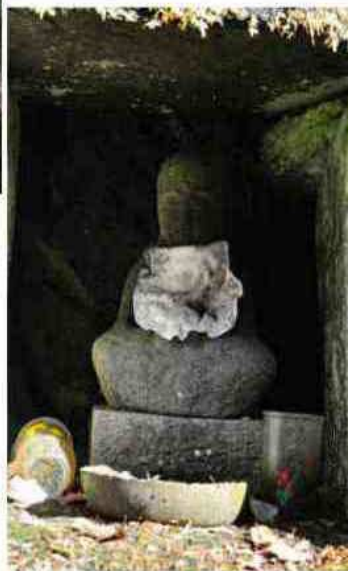
44 色ノ峠



45 四ッ辻



47 地藏尊



47 地藏尊



46 供養塔?



49 十里石



48 かしが峠の地藏尊



50 常夜灯



51 東光寺



53 沈下橋たもとの供養費



52 東川の純真の墓地



55 老僧淵



54 面河川にかかる沈下橋



56 墓石群の一つ



58 首なし地藏



57 シデの大木



60 天下泰平の石



59 十一里石



61 赤蔵ヶ池



64 盗人石



62 三筋の馬道



65 十二里石



63 石鎚展望所



66 大師堂



67 猿楽石



69 土佐境標柱



68 底なし沼



70 黒滝峠の馬頭観音



70 黒滝峠の地藏尊

